

科学研究費補助金（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	19102001	研究期間	平成19年度～平成23年度
研究課題名	美術に即した文化的・国家的自己同一性の追求・形成の研究—全アジアから全世界へ	研究代表者 (所属・職)	小川 裕充（東京大学・東洋文化研究所・教授）

【平成22年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
○	B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>(意見等)</p> <p>研究代表者が個別専門分野（中国美術研究）において地道に精力的に網羅的に仕事を進めていることは十分に認められる。</p> <p>本研究の課題にある「全アジア的な」「文化的国家的自己同一性の追求・形成の研究」に関して、3年を経過したにも拘わらず、研究代表者、研究分担者、連携研究者を問わず、どのような研究成果を挙げつつあるのかがほとんど不明である。その背景として、(a) 絵画第1班を除いて全般的な研究体制が年度を追うごとに先細りしてきているという点、(b) 絵画第1班と他の8研究班との相互連携が不十分に見えるという点、(c) 課題研究に関する理論と方法論が明確でないという点が挙げられる。</p> <p>したがって今後残された研究期間において、①海外調査とは別に、早急に国内での研究体制を建て直す必要があり、②それを通してそれぞれの班の成果をまとめる作業をしたうえで、③それらを持ち寄って全体仮説を検証するべく、全9班による全体討議の場を設ける、(国際)シンポジウムを開催する等の工夫を施し、④そこから得た研究成果を踏まえて「文化的国家的自己同一性」の概念を仮説として明確にし、⑤最後にこれらの全体成果をまとめたうえで何らかの形で公表するよう期待する。</p> <p>また、本研究遂行にあたっては、座標の両極として日本とオーストラリアを位置付けているが、オーストラリアについては連携研究者1名が個別研究成果を挙げているのみで、本研究全体にこの「両極」が活かされているとは見えない。今後残された研究期間において、この点での前進を期待する。</p> <p>美術研究を国家や都市のアイデンティティ形成と関連づけるという着眼点は興味深く、積極的に研究をまとめ、基盤研究（S）に相応しい学術上の成果を挙げることを期待する。</p>	